

# ニッポン

ドクター和の



# 臨終凶巻

11月16日は「世界臓臓(すいぞう)がんの日」でした。もっと臓臓がんに関心を持つてほしいと、患者団体パンキャンジャパンが啓発をしているものです。私は59歳ですが、ここ数年、同年代の友人が数人、このがんで旅立ちました。ミドルエイジ・クライシスという言葉を通して想します。

2016年1月に臓臓がんで亡くなられたジャーナリストの竹田圭吾さんもまた51歳でした。臓臓がんで発覚したのは13年。ステージ3でした。人間ドックを受けていたのになぜ? と普段は冷静沈着な竹田さんが、大変ショックを受けられたそうです。

## 31 竹田圭吾



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東第2内科学。1995年、大阪府立総合医療センターに勤務。長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総診療を目指す。「痛くない死に方」は、近著「死ぬまでベストセラー」もベストセラー。関西国際大学客員教授。

「職業柄、病気のことをいろいろ調べてみました。臓臓がんについて書かれているのは、厳しいことばかりで落ち込んでしまった」

確かに臓臓がんは治療の難しいがんです。発見時に7割は手術ができる状態ではなく、できても1〜2年以内に9割の人が再発します。竹田さんは手術を受けましたが、術後9カ月目に再

発しました。

しかし、その後も抗がん剤治療を続け、発覚から2年半、充実した日々を送られました。15年9月には、テレビでがんを告白。同じがんの人たちに大きな勇気を与えたことでしょう。臓臓がんが死と直結すると思われるのは間違いないと、と。

実際、私が臓臓がんを見つけた患者さんでも、10年以上も元気な人が何人かいます。臓臓がんにも多少の種類があり、長生きできるタイプもあるので

中にも数人おられました。国内旅行か、遠くでも韓国やグアムくらい。アメリカ旅行を決断したことは正直、驚きでした。強い意志と家族の結束力がうかがえます。

帰国後すぐ、16年1月4日に最後のラジオ出演。その翌日夜に発熱し緊急入院となりました。入院後、竹田さんは「家に帰りたい」と連発したため、ご家族は在宅医療の準備をしたそうです。しかし間に合いませんでした。

竹田さんは家族4人で15年12月28日、海外旅行に出発しました。亡くなる2週間前に日本を発つたことになりました。米ニューオーリンズで、大好きなカレッジフットボールの試合を楽しんだということ

です。臓臓がんは身近で、厳しい病気です。しかし、決して絶望することのないように。旅行や仕事を最後まであきらめなかった竹田さんの生き方は参考になるはず

# 臓臓がん生き抜いた気力